
代打屋

細河いをり

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

代打屋

【Nコード】

N6591C

【作者名】

細河いをり

【あらすじ】

会社社長の星野は焦っていた。大事な取引を直前にして、経理課長が事故にあって入院したのだ。このままでは取引はご破算になる。絶望した星野の前に「代打屋」の看板があった。人の代わりならばなんでも引き受けるという。藁をも掴む思いで、星野は代打屋の玄関をくぐった。

「代打屋」なんでも、代役引き受けます」

星野啓三がこんなわけのわからない看板を見たのは、電車を降りてすぐの、駅の真ん前だった。

星野は困っていた。しかも、並一通りの困り方ではなかった。困ったという要素があれば、彼の脳髓からあふれ出て、辺りが洪水になるかのごとくの困りようだった。

星野物産の社長である彼は、これから x 信用金庫に対して融資の依頼をしに出向くところだった。不景気も手伝って、会社は現在やや下り坂。しかし近々大口の取引を控えていた。この取引を成功させれば、会社が上向きになる可能性は高い。だがそのためには、まず信用金庫から運転資金を借りなければならぬ。このような状況で一つでも歯車が狂うと中小企業はすぐに命取りとなる。

今日は将に大一番と言っても良い重要な日だった。この日のために、星野は会社の経理課長と共に、 x 信用金庫にお百度を踏んだ。デフレが続く景気の中、金融機関は極端な貸し渋りを行っている。こんな状況で融資を受けることが内定できたのも、星野と経理課長のしつこい依頼と努力があったからに他ならない。

そしてなんとか今日の日を迎えた。後は経理課長の前川と共に、 x 信用金庫に出向いて手続きを終えればよかった。その日恵比寿で小口の取引を終えた星野は電車に乗って約束の駅まで向かった。電車が駅に着いた途端、星野のところに飛び込んできた電話は、経理課長の前川からだった。

社用車で移動して、星野を迎えに行っていた前川は事故にあったのだという。相手からぶつけられたもので、しかも負傷をってしまったらしい。とても、迎えに行けるような状態ではないという。

星野は愕然とし、そして絶望した。経理課長がいなくて、融資の取引ができるなどは到底思えなかった。中小企業故に、星野も会

社の状況はよく把握している。しかし、金融機関に詳しく状況を説明するには、やはり専門の部下の助力が必要なのであった。

このままでは融資は受けられなくなる。すると星野の会社は？

倒産、という考えたくもない二文字が浮かんだ。それを避けるためにこの日まで頑張ってきたというのに。くそ、前川の馬鹿め。星野は文字通り地団駄を踏んだ。そして絶望にうちひしがれて駅の外に出た途端、例の看板を見つけたのである。

それは、高級マンションの一階に、いかにも不釣り合いにあったマンションの一階が店舗として開店されることはよくある。しかし、この場合、一階部分の、ほんの一角を借りて店舗が開かれていた。幅にしたら五メートルもあるだろうか。狭い間口の、しかも自動ドアでさえないガラスの引き戸。その上にデカデカと「代打屋」の看板が掲げられていたのである。

星野は思わずその前に立っていた。仕方がなかった。こんな時に、こんなわけのわからない店に頼るのは愚の骨頂と思われた。しかし、もう他に方法はなかった。とにかく、今自分が取れそうな道を、星野はほとんど無意識に模索していたのである。

手動のガラスの引き戸を開けると、そこが店内だった。店内というほどのこともなかった。六畳程度の小さい事務所。あるのはただ応接セット。そして、そのソファアの上で、やせぎすの中年男が、妙にだらしなくよだれを垂らして大きないびきをかいていた。格好だけは少しくたびれた背広を着て、割にまともに見えていたが、どう考えてもまともな店とは思えない。

ぎよつとした星野の前で、男のいびきがぴたりと止まった。そして起きあがる。眠たそうな目をしょぼしょぼさせながら、男は、まだよだれが少し残る口元をほころばせた。

「いらつしゃいませ。我が代打屋に、なんのご用ですか？」

「君が…いや、あなたが代打屋ですか？」

「おっと、申し遅れました。私が社長の高井です。高井と言っても、お値段はそれなりに安いですよ、ははは」

のっけから飛び出した寒いジョークに、星野ははっと我に返った。そうだ、こんなところに自分は何をしにきているのだろう。正常に戻った判断力がそう告げていた。急いで会社に連絡して、経理部の誰かを呼び出した方が、仕事の成功率は高くなるはずだ。うまくいけば融資が受けられるかもしれない。何を馬鹿な所に自分は来ているのだ。

しかし、そんなまともな判断力を働かせようにも、もう彼は一人の客となつて、このわけのわからない店主に対応するしかない状況となつていた。話は変な方にとんとん拍子に進み、いつしか星野はソファーに腰を下ろしてしまつていた。

「それで、何を代打すればよろしいですか？」

高井氏にはこやかに笑つた。笑うと貧相な顔が余計に貧乏くさくなる。

「あなたはなんでも、代打をするのですか？」

「はい、代打専門ですが、何でもやりますよ。他人の代わりならば、野球の代打から学校の教師、経理事務まで何でもやります。一応、一通りの技術は身につけていますのでね」

少しだけ誇らしそうに高井氏は言つた。そして彼の言つた、最後の経理事務という言葉が星野の耳朵を打つた。この男は経理のことを知っているのか？

一瞬、心はぐらぐらと揺らいだ。普段の星野だったら、社外秘になるような経理のことを、敢えてこんな男に頼まない。人を頼むにしても、しかるべき筋に頼んで、きちんとした人物を回してもらおう。しかし、今はもうどうしようもなかった。実は、取引の時間まであと一時間しかないのだ。場所そのものは車で十五分だが、星野だけ行つてもどうにもなるものではない。書類そのものは事前に星野が預かつていたので交渉の席には着ける。しかし、かといって星野だけではどうにもならないだろう。

「実は…その経理のことなのです。これから取引に行かねばならないのですが、我が社の経理課長が先ほど事故に遭いまして…」

「はあ、それで私に代打を？」

「頼めますか？」

「もちろんです。して、取引は？」

「一時間後で」

「随分せつぱ詰まっていらいっしやいますね。わかりました。そういう時こそ代打屋の出番です。よろしければ、その取引の資料をお見せくださいますか」

星野はためらった。ためらったが、それはほんのわずかの間だった。もう、事態はどうにもならない所まで来てしまったのである。

冷静な対応が取れなかった自分が馬鹿だし、経理課長を車で来させたこともミスだった。その報告を聞いて動転した自分も馬鹿だったし、こんな店に飛び込んだ自分も馬鹿だ。そう思った。

しかし、彼は気がつけば、書類の入ったトランクを高井に渡していた。彼は手にとってそれを忙しく見始めていた。見ること十五分、高井は大きくうなずいて星野に言った。

「分かりました。では、現地に向かいますよ」

「分かったのですか？」

「はい、私は代打屋ですから。では、社長、車の方をお出ししますので、しばらくお待ちください」

まるで、昔からの社員のように、高井氏は言った。星野は思わず崩れ落ちそうになった。しかし、既に賽は投げられた。しかもわけのわからない場所で。

こうして星野は暗澹とした思いを抱き、時折言語不明瞭になりながらも、指定された取引の場所へと向かったのである。

高井氏の交渉術というのは誠に見事だった。信用金庫の頭取を相手に、彼は朗々と会社の現状を説いた。そして、今後の取引の展開

について、実に流麗に、しかし隙無く語り継いだ。頭取は反対することもなかった。そして取引はすんなり終わり、星野の会社は実に良い条件で融資を受けることができた。こうして会社は危機を脱したのである。

数日後、星野は指定された代金と、手みやげのまんじゅうを持って、再度高井氏の事務所を訪ねた。高井氏は相変わらずソファーに寝転がって大いびきをかいていた。

「おや、いらっしやいましたか」

星野が店に入ると、高井氏は先日のようにソファーから起きあがって眠い目をこすった。

「代金の方を、お支払いに来ました」

星野はそう言って懐から封筒を取り出した。大仕事だったというのに、高井氏が星野に要求した代金は一万五千円ぽつきり。それは、会社の危機を救った大仕事にしてはあまりにも安い金額だった。星野としてはこの10倍を出してもよい気がしたのだが、高井氏は断固としてその金額以外は受け取らないというのである。

「確かにいただきました」

高井氏は報酬の入った封筒を受け取ると、事務所の後ろに引っ込んだ。次に戻ってきた時、彼は領収書とお茶を持って星野の前に現れていた。

「おかげさまで会社も助かりました」

「それは、なによりでした。お役に立てて何よりです」

星野と高井は向かい合って茶をすすっていた。茶は、こんな貧相な事務所には珍しく玉露の高級品だった。妙に思いながら星野はその茶をすすり、ふと疑問に思ったことを口に出した。

「高井さんは、もう、ずっとこんな仕事をやってらっしやるんですか？」

「そうですね。私の人生、代打ばかりですよ。他人の代わりをして、それでいくらかのお金をいただく。まあ、そんな生活です」

「しかし、私は不思議に思います。あの取引の時の貴方の手際によ

さ。説明の見事さ。あなたなら、会社の経理事務長が十分に勤まる。あの力だけでも、あなたは十分にやっつけていけるでしょうに」

星野は先日取引の時の様子を思い返していた。高井氏の説明は実に見事での確だった。十五分しか目にしていない資料の数字を完璧に暗記していて、それを巧みに説明に使用してた。前半期の純利益と設備投資の様子。現在の金利と、借入れ金との金利関係。複雑な状況を巧みに、しかし取引に都合良く引用していたのは、ほとんど神業と言ってもよかった。

「それが、できないんですね。私は、代打屋だから」

「どういうことですか？」

「私は、他人の代わりをする時にしか、力を発揮できないんです。どうしても、その人がいなくて困った状況、せっぱ詰まった状況でしか力を発揮できない。私という人間には、そんな困った特性があるのです」

高井氏は大きな目をしょぼしょぼ瞬かせながら、古びた茶碗で玉露茶をすった。そして、ぽつり、ぽつりと話し出した。

「もちろん、私も会社勤めをしたことはあります。しかし、何をやっても私は会社でビリでした。すぐにドジを踏んで、迷惑ばかりかけていました。そして、常に職場を追われる状態になってしまいました。不思議なものでしてね。普通に勤めていると、私は人並み以下の力しか出せないのです。それで、随分と職を転々としました。私が一通りの仕事が出るのはそのためです。正直、美容師から板前までありとあらゆるものを経験しました。しかし、一つも私はものにすることができませんでした。」

ところがです。こんな私ですが、それが【人の代わり】である時には、私とは思えない力を発揮できるのです。こう、なんですかね…頭がすつと冴えていって、何もかも分かったようになってくる。

そして、そういう時に仕事をする、非常によい結果を残すことができる。なぜなのか私にはわかりません。しかし、私ができるような人間である以上、私は代打屋でしか生きる道がないのです。」

「人の代わりしか、されないのですか？」

「そうですね。本当に、代わりだけです。始めはこんな自分を嘆きました。そして、呪いました。普段の生活では人並みのことは何もできない私です。しかし、途中から気がつきました。人の代打が出るということが、私にとっての天職なのだと」

「それで、代打屋ですか」

「そうですね。代打屋専門です。よくいらっしやるんですよ。私に代打を頼んでうまくいったので、私を専属で雇いたいという人が。けれども私はその方々にははっきり申し上げています。専属で、【代打】でない私は、人並み以下の力しか発揮できない。逆にその人に迷惑をかけることになる。社長さん、そういう次第ですから、このこともご了承ください。間違っても、私を続けて雇おうなどと思わないでください」

星野はぎくりとした。実際、そんなことを考えなくてもなかった。人材が足りないと言われるこの世の中。優秀な人物だったら常に引き抜きたい、使いたいと考える。しかし、目の前の男は代打しかダメだというのであった。

「じゃあ、本当に、人の代わりしかされないでやっていけるのですか」

「そうですね。以前は嘆いていましたが、今は違います。今の私は自分が代打であることを誇りに思っています」

「誇りに？」

「今、社長さんは疑問に思われましたね。でも、本当はその認識が間違っています。人の代わりというのは恥ずかしいことでも何でもない。逆に、その人が必要とされている時です。だから、私は今、誇りを持ってこの仕事に臨んでいます。今の私からしたら、人の代わりを恥ずかしく思うことの方がおかしいですね。逆に、無くて困っている人の代わりを務めることができることを、本当はもつと感謝されてもいいのではないかと思うのです」

星野は聞いているうちに恥ずかしさを覚えてきた。中小企業とは

いえ、星野の会社は一つの企業である。その中では当然何人か、代替職員を雇用していた。病欠となつてゐる正社員の代わり、産休に入つてゐる正社員の代わり。全て、代わりに、臨時的に雇つてゐる社員である。

しかし、その人たちに星野は、満足な待遇を与えてゐるとは言い難かつた。思はず彼の背中に冷や汗が流れた。代打の職員ということとで不当に低く評価し、安い給与で使つてゐる。しかし、彼らがいなかつたら、星野の会社はどうなつていただらうか。

「いやいや、くだらない話を、失礼しました」

高井氏は言つてお茶をすすると立ち上がった。星野はお茶の入つた茶碗を持つたままつむくしかなかつた。

「すみませんが、私はこれから妻を駅まで送らなければいけませんので。申し訳ありませんが、これで」

高井は店の外を指さした。力なく星野は首を上げてそちらの方を向いた。店の外にはキリつとしたスーツ姿の美女が立っている。星野は仰天した。その顔は、記憶に間違いがなければ、都内でも有数の不動産屋を経営している女社長のものであつた。まだ三十代半ばにして巨万の富を築いたとして、経済界でも噂になつてゐる女性である。

「ひよ、ひよつとして、高井さん、あなたの妻というのは？」

「あ、そうですね。安井貴子です。安井といいますが、売つてる土地は高いし今の姓も高井。なんちゃつて」

「あ、あの人があなただの、妻？」

「まあ、そうですね。去年、友人の代打で見合に行つたら妙に向こうが気に入りましたね。おっと、急がないと」

そこまで言うと、高井氏は慌てて店の外に出て行つた。金持ち美女はすぐにべつたりと高井氏に寄り添う。そして二人は車に乗り込むと、すぐに遠くへ消えていった。

野球での代打は、試合の流れをすっかり変えてしまうことがある。どうやら高井氏がかんだ殊勲打というのは、とてつもない満塁ホ

ムランだったらしい。

一人残された星野はただため息をつくしかなかった。半年の入院になった経理課長前川の代打を誰にするか悩まなければならなかったからである。

(終)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6591c/>

代打屋

2009年6月27日21時46分発行